

「中世の里シンポジュウム」開催にあたっての問題意識

——北の中世史研究に寄せて——

工藤 清泰

はじめに

一九九〇年一〇月二〇・二一日に『今、歴史学は地域に何ができるか』というテーマのもと浪岡町で開催された「中世の里シンポジュウム」⁽¹⁾（以下「中世の里シンポ」と称する）を企画・担当した者として、開催にあつた問題意識を提示し、中世考古学を専攻する学徒としての責をはたしたい。なお、「中世の里シンポ」⁽²⁾に関する進行内容・発表内容および討議内容の成果報告書は後日発刊予定であるため、記述の重複をさけ開催に至るまでの筆者自身の「思い」を中心に述べる事をお許しいただきたい。

「中世の里シンポ」を開催しようと思ったのは、一九八九年一二月頃浪岡町役場企画課の職員から地域づくり対策費があるから何か考えてくれないかという依頼があつた時である。浪岡町が例の「ふるさと創生一億円」⁽³⁾がらみの住民討議をくり返しおこない、「みちのく中世の里部会」なる町民レベルの議論が白熱していた時期でもあつた。「中世の里」というネーミングは、これら住民レベルでのわかりやすい名称の一つであつた訳で、厳密に学問的意味からの呼称ではなかつたのである。しかしな

がら、シンポジュウムを学術的に開催するためには、「中世の里」の定義が必要となつた。新年度に入り、予算が確定するとあわてて要項案を作製し、各依頼者の感触を探ることにした。ところが私自身の意図した所と行政担当者サイド（私自身も行政担当者ではあるが）意志統一がなされないまま、かなり無理をしいられた点があつた事も事実である。行政担当者に学術シンポ開催の意義を語つても所詮馬に念仏の面があることは性がないとしても、その方法いかんによつては学界で受け入れるだけの内容になるだろうと、淡い期待を抱きながらヤケのヤンパチで始めたというのが本音なのである。

以下、どのように事態が進行していったか概略の説明に入りたい。

一、問題意識の所在

私自身十数年間に亘る浪岡城跡の発掘調査を担当してきて、常に頭を悩ます問題が三点ほどあつた。

第一は、中世という時代を対象とする考古学の研究方法論である。発掘調査をして検出される遺構、出土とする遺物はリアルタイムで中世と



いう時代背景をあらわす「物」になっているのであるが、「物」が語りかける要素を解釈し提示できる状況になれば歴史学とは言えないのではないかと問題である。その問題解決のためには考古学自身の方法論を鍛えなければならぬのであって、単に諸学の成果を取り入れることではないような気がしていた。

第二は、考古学研究の限界である。歴史学における資料の範囲が文献・絵画・考古資料・民俗事例・金石文・自然科学的分析等のように、使えるものはどんなものでも使って歴史を組み立ててゆこうとする方向になると、考古学という学問領域に固執しては将来的志向を歪めることになるのではないかと問題である。つまり、学際的研究姿勢の助長ということになるが、第一で考えた通りそれぞれの学領域の基盤がしっかりしたものでなければ学際的研究は不可能であり、つまみ食いはいけっして益にならない。

第三は、学問的成果を社会の中でどのように還元してゆくのかという問題である。少なくとも公の金で発掘調査をして、その報告書を研究者だけに配布すれば学問的であるとの認識は誤りであり、受益者・住民レベルでの還元が必要なのではないのか。もし、そうであれば学問的にも日常生活の面でもより高次の段階に至るのではないだろうか。

以上の問題点を踏まえ、「中世の里シンポ」開催にあたって私は自分なりの見解をまとめ諸先生方⁽³⁾（講師・発表者等）に提示することにした。

『シンポジウム開催にあたって』

今回のシンポジウムが、「中世の里」という言葉を付したのはそれなりに意味があります。「中世」という時代性、「里」という地域

性が全国各地の市町村の中で脈々と息づいていることは言うに及ばないことですが、「中世」という時代性を正面にとらえ、「里」という地域性を土地に刻みこんでいる事例はそれほど多いことではないと思います。地域活性化などと念仏のように唱える現代社会のなかで、我々研究者は今一度、時代性と地域性を問い直す必要があるのではないのでしょうか。

何故このようなことを思い立ったかといいますと、歴史学という学問が普遍的に有している時間と空間の概念は、今日の住民生活を考えるうえでたいへん貴重な視点を有しているのではないかという点が第一点として上げられます。それは行政主導の社会運営が、ゴミや環境、生涯学習などの教育、農業・商業を取り巻く国際化の流れの中で、行き詰り状況を呈してきつつあると思われ、人間個人の生き方とともに地球人としての生き方が今後の重要課題として浮かび上がってきていると考えます。その事は、歴史的に歩んできた人間社会の進むべき方向性が、単に現代と未来だけに存在するのではなく、過去の人間事象すなわち人間の歴史の中にこそ存在するのではないか、という意識を喚起するのです。ちなみに、地域の中に存在した規範や信仰は、都市化・マスメディア化の中で画一的な志向を助長し、土地の古老に耳を傾ける若者が居なくなった事実からも立証できると思います。

第二点として、住民が参加すべき民主主義のルールがある程度確立した社会において、住民が個人として社会人として「愛すべき対象」をどのようなものに対応させるのかという問題点であります。

郷土という言葉は一面において閉鎖的な意味を有しますが、郷土が存在する事実を冷静に見つめ直すと郷土より広い世界（地域あるいは国家）が存在し、さらにそれより広い世界との共存によって、「郷土」そのものが実存していることを理解できると思います。このような視点は、地域と国家が歴史的にどのような関係にあったのか、さらに当地北日本地域・津軽地域にどのような歴史的特質が存在したのかといった歴史的課題と不可分の関係にあると思われまふ。そのためにも「中世」という時代性と「里」という地域性を理解することが研究者の責務であり、理解の後の住民への提起が現代的要請になっているのではないのでしょうか。

以上二点を住民の側に立つて考え直すことが本シンポジウムの重要な視点であると考えています。現在、中世史研究は文献のみの解釈論議から、考古資料に基づく声なき人々の生活実態と交流の実態、絵画資料によるビジュアルな人と物の実態、民俗資料による大地に営まれた精神と物の変遷、建築史や職人史的観点から技術系譜としての位置付け等、多岐にわたる研究分野が進展し始めています。それらを総合的に把握する契機となり、地域に投げかけることができるのであれば本シンポジウムの開催は実りの有る豊かなものになるでしょう。」

この一文に関して、あまりにも観念すぎるとの指摘はあったものの、おおむね賛意を得れるという状況認識に達したため、私は中世の里シンポのシナリオづくりに入った。

二、「中世の里シンポ」のシナリオ

まず、北日本の中世社会の原点を平泉藤原氏の成立ととらえ、平泉の発掘調査の現状を理解しようと考えた。これは本沢慎輔氏の不慮の事態のため実現することはできなかったが、一九九〇年における伝平泉柳之御所跡の発掘調査及びそれに付随する諸問題はマスコミ等を通じて広く理解されていたため研究者への本シンポ意図は理解できたのではないだろうか。さらに、私個人としては平泉藤原氏の後に津軽安藤氏の諸問題を提示しなかった。しかし当初の意図とは相違して中世都市としての平泉を再度提示することになったが、やはり北日本の中世史における津軽安藤氏の存在は大きく、中世の里シンポの全休構成の中で物足りない点として指摘できるはずである。

他に、当初の要項案に提起したものとして中世の陶磁器製作と交流の実態があった。これもシンポの日程調整等のため没になったのであるが、中世考古学の分野のうち遺物論がまったく欠落してしまった事を反省するとともに、あえて一部の遺物プロパーを切り捨てた事が文献史学と考古学の接点を見出しやすかったという利点ができたのかもしれない。

中世考古学分野の発表としては高橋与右衛門氏に「建物」ということで話していただきたい由依頼し快諾を得るに至ったが、発掘成果の基本となる「どのような建物があったのか」を明確な分類によって提示いただいたことは、後段で復元的遺跡整備の話題を深める意味でも大きなことと考えている。また地元浪岡城の話題は「中世の生活」という面で依頼したのであるが、実際に出てきた内容は一九八八年までの成果だけで

あつてそれ以降の分析がまったくなされていない、不十分な内容と言わざるを得ない。特に、市村高男氏の浪岡城に関する検討、中世前半から浪岡の地における都市的場の形成など、地元の人間が提示できない所に残念な点があった。

市村高男氏の発表は当初の予定にはなかったものであるが、浪岡城と勝山館の事例が考古学側だけの発表で終止するよりは、文献史学からの発表も必要だと言われ、急拠依頼することになった。結果的には戦国城館のとらえ方をグローバルな視点に高めた状況になったため、最良の方向に進んだのではないかと認識に至っている。

私自身、最後まで悩んだ点は松崎水穂氏に依頼した「史跡整備と歴史研究」という大課題であった。現実的にこの課題で発表できる人物は松崎氏以外ないとの認識に立つての依頼であり、残務整理中にたびたび電話をいただいて発表内容の討議を重ねたことは今回の発表内容がまさしく中世の里づくりの指針となったことから、氏に感謝の意を表したいと思う。

最後に、石井進先生の記念講演と討議司会の小野正敏先生は、私自分の方々に依頼しなければ「中世の里シンポ」の目的を見失うことになりかねないという、絶対の気持ちでの依頼であった。小野先生は以前にも浪岡に来町し浪岡城の出土遺物をつぶさに観察していたし、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の調査を長期に亘って担当していた実績に拠るところが大であった。

石井先生の依頼にあたっては、私自身浪岡城跡出土銭貨の事で便りをさし上げた時、懇切なお返事をいただき大変恐縮した事や、文献史学の

立場に立脚しながら若輩の考古学徒にも耳を傾けていただける事、さらに一の谷遺跡の例のように遺跡の保存に関して各種の提言がいただける事などが強く私自身の心を引き付ける要因であった。さらに、「中世の里シンポ」の一ヶ月前に事前に浪岡を下見なさる行動力に接した時、私自身大変な感動を覚えたものである。

以上の布陣に基づき、最終的に討議をどこまで深めるか、この事は参集者や発表内容と係わるため一〇月一九日、シンポ前日に発表者・司会・顧問等を一同に会して検討した結果、

一、浪岡で開催する「中世の里シンポ」の意義を踏まえ、単に研究発表の場ではなく研究の成果を地域の中に還元する方向を模索する。

二、その上で主題となる浪岡城を学問的にどのように評価するか、

全国的視野から北日本的な地域論まで検討する。

三、それらに基づき、史跡の保存と活用に関して歴史事実をふまえた環境整備への方向性を探り、住民対応をいかに考えるべきか討議を深める。

という方向性を見い出すことができた。

このような事前のシナリオづくりの正否は別にして、「中世の里シンポ」に取り組む各人の意識に若干のニュアンスの差はあれ、共通の合意が醸成されていたと考えることができる。

三、「中世の里シンポ」の位置

浪岡町では一九八五年一月にも「中世考古学の諸問題——浪岡城跡

を中心に——」というシンポジウムを開催している。このシンポジウムは浪岡城跡北館の発掘調査が一段落した時点でその成果を内外に公開しようとする目的で行われたものであるが、考古学の殻を脱する事なく今だ歴史的討議に至らずの感があつたシンポジウムである。

あれから五年を経過して、中世考古学に対する認識は私個人の中で大きな変化をとげた。それは、一九八六年八月に福井県で行われたシンポジウム「一乗谷と中世都市・都市の構造と生活の復興」に参加した事により浪岡城跡に対する視点の変革をうながされた要因が大きい。浪岡城跡は軍事的・政治的に作られた城館であるとの認識に立つて発掘調査を続けてきた者にとって、もしかしたら城下町の一部かもしれない、もしかしたら経済交易エリアの一部かもしれないという発想はまさに一八〇度の方向転換とも言える。「城館」とは何なのだ、発掘調査で現出した遺構・遺物は何を表しているのだ、という意識が渦を巻いてわきあがってきた。

これらの問題意識を胸中にいだきながら、私個人は文献史学の方法論に学ぶべき道を求め始めていた。

一九八七年二月に鹿角市で開かれたよねしろ考古学研究会発表会で最初に浪岡城跡北館における遺構変遷案を提示してから、一九八七年八月（東京）第一回東国中世土器研究集会、一九八九年八月に第六回全国城郭研究者セミナーにてシンポジウム『城郭の構成要素を考える——曲輪・堀・虎口——』の発表に至るまで、浪岡城跡の城館としての評価は考古学的に集落構造論の方向に進んでいったのである。それらのベースになったのは一九八七年三月にまとまった『史跡浪岡城跡環境整備

基本計画「報告書作製時の分析作業であったと考えている。くしくも」中世の里シンポ」で木村浩一氏が発表した内容はその報告書の焼き直しだった訳で、「浪岡城は津軽の一乗谷か」という問題意識が発想の原点になっていたのだと思う。

さらに、一九九〇年一月には大阪にて「中世末から近世のまち・むらと都市」のテーマの基に全国規模の資料集成がなされ（第27回埋蔵文化財研究集会）、同年四月には山梨において「考古学と中世史研究——中世考古学及び隣接諸学から——」と題して考古学・文献史学・民俗学等の隣接学等が結集したシンポジウムも開催されるに至った（山梨文化財研究所主催）のである。これら全国視野からのシンポジウムに肩を並べる事はできないし、またしたくもなかったのが「中世の里シンポ」であった。

当地において、北海道・東北史研究会が主催する「北からの日本史——地域・民俗・国家」をテーマとする函館シンポジウム（一九八六年七月）・弘前シンポジウム（一九八八年七月）・上ノ国シンポジウム（一九九〇年七月）はまさに歴史学の大道をゆく企画であるが、もつと考古学の成果を取り入れられないのかという疑問があった。それは一九八八年八月に発刊した「よみがえる中世4——北の中世・津軽・北海道」において部分的解消はみたものの叙述内容に「館の機能は明らかにとりでとして理解できよう」等、文献史学の成果を取り入れぬままの状況もありもどかしさを感じたものである。

文献史学の立場からも重要な文献が提示された。一九九〇年二月に刊行された『北日本中世史の研究』がそれで、羽下徳彦教授は序において

「中世日本の支配権力の複合性、地域社会の交叉の多様性は、現今の学界共通の認識であり、これを地域の視座において攷究せんとする研究、殊に共同研究が世に問われつつある」と示し、『北からの日本史』『中世東国史の研究』を例示して「北日本・中世」の研究視座を提起している。

このような歴史学の動向の中で、「中世の里シンポ」は文献史学研究者の不得手な「物」と考古学研究者の不得手な「精神」をどのように調和させえるのか、その事が重要課題であった。おそらく、視点として「北日本・中世」を充実させるためには関東・西国以上に考古資料を活用しなければならぬのに、多大な資料を咀嚼しきれぬまま論を進める研究者も居り、行政的発掘調査が優先される考古学研究の質的問題点ばかりでなく、学問の相互情報交換という日常的問題点と深く係わっている印象があった。

おわりに

今、「中世の里シンポ」を終え、報告書作製の具体的作業に入っている時に気にかけてざるをえない書籍が二冊ほど手元にとどいた。一つは、一九九〇年一〇月刊行の「沈黙の中世」（平凡社刊）、今一つは一九九〇年一二月発行の「月刊歴史手帖・小特集 よみがえる中世世界」（名著出版刊）である。

前書は、網野善彦・石井進・福田豊彦の三氏による対談集であるが、「銭」「北」「鉄」「歴史学と考古学」という四大テーマに添って語り合う内容は中世考古学研究者必読の書であるとともに、考古学成果の歴史学的

提示であるという点で傾聴しなければならないことばかりである。内容について一つ一つ言及することはできないが、「沈黙」していた考古資料が中世という時代の中に静かにそして大きなウェイトを占めながら歩み始めたということと多大な評価を与えることができると思われる。「中世の里シンポ」との関連で言えば「北―海・交通・〔日本〕」と「歴史学と考古学」のテーマは、ほぼ同一視点の立脚と言えるし、近年の過剰発掘による資料研究が考古学領域だけにとどまらないことと、どのような視点で発掘資料を見るべきなのかという明確な解答を与えているように思う。

後書は、一九九〇年八月に静岡県磐田市で開催された、「よみがえる中世世界」シンポジウムの要旨をまとめたものである。私自身は出席していないため会場の雰囲気については無理解であるが、現今の中世遺跡に対する研究視点を明確に反映している内容と考えられる。行政的遺跡保護、文献史学、民俗学、考古学それぞれの立場からの発表を中心に「中世史のより豊かな構築のために、今、何をなすべきか」をテーマに討論がなされている。磐田市が「一の谷中世墳墓群」の消滅によつて得られる代償が何であったのかに思いをめぐらせる時、浪岡町が浪岡城跡を保護し、発掘調査し、環境整備してゆくことが、現在に生きる私たちの歴史的いとなみなのではないか、そういう気持ちが起こってくる。

「中世の里シンポ」は、まさに町民による文化財保護を考える場として設定したつもりであった。しかしながら、歴史学研究を無視した文化財保護はどうてい認められないはずであり、その成果を町民に投げかけ、ふたたびもどつてくるためには、まだまだ時間と費用がかかるはずであ

る。少なくとも歴史学が目指す現代社会への貢献は、中世史の中で芽を出そうとしていることを「中世の里シンポ」が語りかけているのではないだろうか。

註

(1) 中世の里シンポジウムの日程は次の通り開催された。

- 一〇月二〇日
- 一〇〇〇 受付開始
- 一〇〇三 史跡浪岡城跡・浪岡町歴史資料館見学
- 一二〇〇 昼食
- 一三〇〇 開会行事
- 一三二〇 記念講演「中世と考古学―地域研究の視点―」
石井進氏（東京大学文学部教授）
- 一五三〇 基調発表(1)「よみがえる中世都市・平泉」
斉藤利男氏（弘前大学教育学部助教授）
- 一六四五 基調発表(2)「発掘された中世の建物跡」
高橋与右衛門氏（（岡岩手県文化振興事務局
埋蔵文化財センター主任調査員））
- 一八〇〇 懇親会
- 一〇月二一日
- 九〇〇 基調発表(3)「戦国期東国の城郭と城下町の実態
―浪岡と下総結城の比較を中心に―」
市村高男氏（中央学院大学教養部専任講師）
- 一〇〇〇 基調発表(4)「浪岡城跡の発掘調査成果からみた中世の

生活」

木村浩一氏（浪岡町教育委員会主事）

一一・〇〇 基調発表(5)「史跡整備と歴史研究

——勝山館の事例から——」

松崎水穂氏（上ノ国町教育委員会学芸員）

一二・〇〇 昼食

一三・〇〇 質疑および討議

司会 小野正敏氏（国立歴史民俗博物館助教授）

工藤清泰氏（浪岡町歴史資料館主査）

一七・〇〇 閉会

（2）現在、日本エディタースクール出版部から発刊する予定で準備を進め、一九九一年夏頃に完成すると考えられる。

（3）中世の里シンポジウムの開催にあたっては、村越潔氏（弘前大学教育学部教授）・高島成侑氏（八戸工業大学助教授）・佐藤仁氏（弘前高等学校教諭）・三浦貞栄治氏（浪岡高等学校教諭）を顧問として委嘱し諸事にわたって御指導を受けた。

（浪岡町歴史資料館主査）